

運搬自転車

運搬自転車の特徴は大きさが普通自転車とだいたい同じだが、前後のタイヤが倍以上太く、荷台も大きく頑丈に出来ていた。

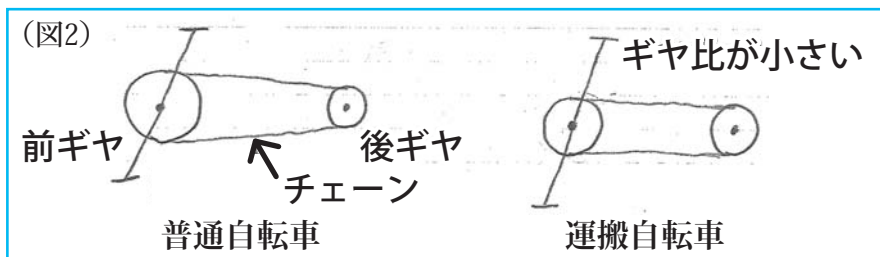
荷物を高く積むために鉄製の門形金具(図1)で、荷物を支えるような物がついているタイプもあった。普通自転車に比べて運搬自転車の前のギヤ径は小さく、後ろのギヤ径が大きい(図2)ので重い荷物を乗せてもペダルを踏み込む力は普通自転車とあまり変わらなかった。(それでも前のギヤ径は後ろのギヤ径よりは大きい)但し、運搬自転車はギヤ比が小さいので荷物なしで走ってもスピードがあまりでなかった。



■ サイドカーを付けた運搬自転車(京阪滝井駅近くにて/平成20年撮影)

また、写真の様にサイドカーを付けて、材木屋は材木を建具屋は襖や障子を配達し、左官屋は左官道具を大工は大工道具やはしごをのせて現場まで利用していた。また、運送屋、畳屋、古道具屋、家具屋、行商の人達は運搬自転車の後にリヤカーを付けてそれぞれの荷物を運んでいた。リヤカーも大型・小型もあった。

サイドカー付運搬自転車や、リヤカーを付けた運搬自転車は今で言えば軽4のトラックや軽4のバンみたいなものです。



街中を走る

運送屋などは戦前より小回りのきく三輪トラック、電気屋とか牛乳屋などは昭和30年代頃よりダイハツミゼットを使い始めましたが、戦前より昭和30年代後半までは街中での小型荷物運搬は人力つまり、自転車が多かったようです。

つい最近まで運搬自転車(単独)は京阪千林駅の近所のクリーニング屋さん、今市商店街の製麺屋さん、豆腐屋さんなどが使っていた。

今でも街中で運搬自転車を使っているのを見かける。現在も京阪滝井駅近くの材木屋さんは、サイドカー付運搬自転車を2台使っています。入りくんだ道を行ったり、駐車に便利のため利用しているらしいです。

昭和30年代ぐらいまで、まだ街中では乗用車やトラックが少ない頃、商店や家庭ではちょっとした荷物を運ぶのに普通自転車(現在:郵便配達に使用されているタイプの自転車)が使われていて、少し重いめの荷物は運搬自転車が使われていた。

燃料屋はマキ、練炭、豆炭、プロパンガスボンベ等、酒屋はビールや酒の箱等、米屋は米袋等を乗せて配達していた。氷屋も、氷と目の粗いのこぎりを積んで注文を受けた店の前で自転車を止めて、氷をノコギリで5分の1ぐらい切り目を入れ、ノコギリの背で「コン」と切り割って、必要な分を店に配達していた。

牛乳屋もミルクの入った瓶の箱を荷台にのせ、ハンドルに空き瓶を回収して入れる大きな丈夫な袋を左右に引っかけて牛乳を配達していた。〈上田(勢)〉

自転車税があった

自転車税を納税した人、又は自転車には自転車鑑札(かんさつ)がわたされた。

(旧布施市の自転車の鑑札)

①



〈説明〉

①写真のアルミの鑑札を自転車のハンドルに付ける
(今で言えば車のナンバープレートである)

昭和26年度市税実収表 大阪市	
普通税	
市民税	77,520,343円
固定資産税	100,229,229円
自転車税	1,667,610円
荷車税	119,400円
電気ガス税	33円

『旭区政誌』より

②



②自転車から持ち主が離れる時は、真ん中の数字の所をスライドさせてはずして持って行く。それがかぎ代わりになる

③



③数字の部分がない状態で自転車を乗っていると、盗難車となりオマワリさんに捕まる。

■ 自転車鑑札写真提供: 上田(勢)